

アンドレア・デル・ヴェッロッキオ作 小さな「木の十字架像」

團 名保紀

基台部としてのゴルゴダの丘の表現を含み総高 85 センチの木製十字架像が個人コレクションに存在する。キリスト像の波立つ平行線群で示された髪の毛の躍動感、気品ある目鼻立ちによる瞑想的な面貌、筋肉及び骨格の精緻でバランスに富んだ表現、背面部を含み見事な三次元性と完成度を誇ることで、全体に深い高貴な精神性が行き渡るのを見て想い浮かべられるのはルネッサンスの巨匠ヴェッロッキオの代表的彫刻及び絵画である。

ヴァザーリは彫金家、彫刻家、画家としてのヴェッロッキオにつき語るが素晴らしい木製十字架像を複数制作したとしており、今日までリズナーはヴェッロッキオ工房作としてパリにあるかなり粗野な印象を与える十字架像を「銀の祭壇」の斬首される洗礼者との比較から発表した。その後パオロツィ・ストロツィはフィレンツェの一体をヴェッロッキオに直接帰属させた。同十字架像は今日バルジェッロ美術館に収められ、ヴェッロッキオへの帰属が大方支持されている。しかし今まさに我々が考察中の小十字架像の、奥深い精神性によるキリストの顔だちの方が、パオロツィ・ストロツィが提起する作のヴェッロッキオへの帰属の根拠としていた「聖トマス不信」やフォルテグエッリの記念碑のキリスト像との近似性で優れ、又引き締まった全身の豊かな解剖学的表現、優美かつ自然なプロポーションに於ても考察中のものがバルジェッロ在のものを凌ぎ、よりヴェッロッキオの作風を反映するのは否めない。こうして新発見の小十字架像こそいかにヴェッロッキオの作たりうるか、それも傑出したものたり得るかが印象づけられ、とりわけ髪の毛をはじめ足の先端迄精緻な細部表現を訴えるその作風を前にとヴェッロッキオが彫金家として小スケールのものの細密な表現に元来たけていたことが格別想起されて来るのでもある。

1468 年フィレンツェ大聖堂はブルネッレスキの大円蓋上、ランテルナの頂上に乗せる銅製の球をヴェッロッキオに発注し、三年後それは完成する。当時必然ヴェッロッキオの想いはその球の上に乗る、実質的に全市の頂点を占める銅製の十字架へも向けられた筈である。しかし十字架は一介の銅製品職人に発注され、この事実はヴェッロッキオに落胆を生ぜしめたと思われる。しかしこれを契機に彼は見事な十字架像の制作を決意したものと考えられる。

考察中の小十字架像はゴルゴダの丘を基台部として強調するが、同部位は円く膨らみあたかも球の四分の一をなすかである。上から見下ろすと基底部外周の輪郭は半円形を示している。即ち同作全体は球体上に設置される十字架というフィレンツェ大聖堂頂上部特有のイメージを反映、まさに当時ヴェッロッキオが抱いたフィレンツェの頂を自作の十字架で飾らんとした野望につき物語るものの如く思われる。

一方ヴェッロッキオは 1469 年以降ロレンツォ・ディ・メディチの命により古代の赤色大理石のマルシア像の修復を担当し、メディチ家にあったもう一体のマルシア像と対

をなすべくその庭の入口に据え付けた。この経験からも劇的かつ肉体的苦痛表現の典型テーマ「キリストの磔刑」に自ら取り組む意欲を高め得たものと思われる。その他幾多の考察から本論考でヴェッロッキオの傑作として見極められることになる小さな木製磔刑像は、ヴェッロッキオによるフィレンツェ大聖堂頂上への鍍金された球の完成、そして「マルシア」像修復の後、恐らく 1473-75 年頃の作とみなすべきものと思われる。